

日本語の時間的表現に関する一考察 — 「～タトコロダ」と 「～タバカリダ」の場合—

洪 競 春

1. はじめに

日常生活の中において、話し手がある状況を説明しようとして選ぶ、いわば積極的な発言姿勢に出る表現がある。たとえば、

(イ) いま、帰ったところだ。

(ロ) いま、空港を出たところだ。

(ハ) いま、駅に着いたところだ。

のような、状況を共有しない相手に、自分のおかれている状況を伝える言い方がそれである。しかし、おもしろいことに、上例イロハの「トコロ」を、それぞれ助詞の「バカリ」に置き換えてみると、

(ニ) いま、帰ったばかりだ。

(ホ) いま、空港を出たばかりだ。

(ヘ) いま、駅に着いたばかりだ。

のようになり、叙述対象の時点と、発話時点とのあいだに、僅かな時間しか経過していないことを暗示するという点では、両者は一致しており、なんら問題がなさそうである。更に、次のような例文の場合はどうなるのだろうか。

(ト) 混迷を続けるロシア情勢、大改革の嵐は吹き始めたばかりなのだ。

(チ) ……しかも、霞ヶ関の官僚は、サマーズ次官の来日に「米政権の特別な圧力」を感じ取っている。というのも、円高が進行した8月19日、サマーズ次官は「最近の円高が日本と世界の経済成長を阻害する恐れがある」と、円高に歯止めをかける声明を発表。細川政権に助け船を出したばかりだからだ。 (読賣新聞「緊急対策—とまるか景気逆流—」)

(リ) ようやく政治改革法案の実質審議が始まったばかりだというのに、永田町では早くも、年内不成立で解散という観測がしきりに囁かれている。 (「週刊新潮」)

上例(ト)・(チ)・(リ)に見られる「バカリ」を、今度は逆に「トコロ」に置き換えてみると、なんとなく不自然さを感じるのである。このように、両者は一見表面的には同類のように見えても、潜在的には相違が認められ、意味的な特性が反映されていることがうかがわれる。畢竟、これは

何故なのであろうか。松村明編『日本文法大辞典』（明治書院刊）をひもといて、「トコロ」「バカリ」の項を引いてみても、ただ、接続助詞の「ところが」についての記述しかなく、（本稿で求めているような）両者に関する詳しい解説は見あたらない。また、『国語大辞典』（小学館）にも、

ところ【所・処】

㊦ 抽象的な事柄について、その位置関係などを示す。

3 （連体修飾語を受けて時間的な位置を表わす）

㊦ その折、その場合などとさしている場合。

㊦ その時を漠然と限定してさす場合。「ほかの時はともかく、その時においては」という気持ちを込めて用いる。「今のところ」「今日のところ」など。

㊦ その状況、場面などとさして用いる場合。「もうすこしで間に合う所だった」

㊦ 形式名詞

3 （「…をした時」の意から変化して、接続助詞のように用いる）上の句の叙述を受けて、下の述語に続ける。

ばかり【許り】【副助】

3 過去・完了の助動詞「た」（文語では過去の助動詞連体形「し」）を伴う動詞を受けその動作が完了して間もない意を表す。…したて。「今着いたばかりの客」

のようにしか解説されておらず、それがどのような場面に、どういう制限条件があるか（文脈の中で、その語が使用できるか否かの意味上の問題）については何一つ触れていない。そこで、形式名詞の「ところ」の意味用法を中心に、「～タトコロダ」と「～タバカリダ」を考察し、その背後にあると思われる日本語のきまりの大まかな仕分けや、それらの語義が表現面に及ぼす特徴や他語との共起・非共起の関係などについて述べようと思う。

2. 名詞の「トコロ」とその転義について

まず思い付くのは、実質的な名詞としての「トコロ」の意味用法である。即ち、

○ この土地はみかんがたくさんとれるところだ。

○ バスにのるところはどこですか。

○ 「今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当たる所を夜中に掘ってみるがよい」
（芥川龍之介『杜子春』）

○ その花が咲いているところへつれて行ってください。

のように、空間的、地理的場所、人や物の存在する場所、何かが生起する場所、ある状態になっている場所などで、いずれも「地点」を表わすものである。更に、

○ えらい人は子どもの時から、どこかちがうところがある。

○ おわりのところはいそいだので、らんぼうに書いてしまった。

- それがこのしばいのおもしろいところだ。
- あなたとわたしでは、見るところがちがうのだ。
- 彼女にはかわいいところがある。

のような、物事のある特徴的な中心となる「部分」「点」「面」を表わす。このような意味用法から、

- 七月の下旬、ぶらりと大根島の家を出て行こうとする頃の彼は、最早何事も為る気の無い人であった。「捨」と母親が呼留めたので、岸本は夏帽子を冠ったまま柱のところに立った。
(島崎藤村『春』)
- 凶らず連中はこの学校で一緒になった。庭へ向いた教員室の窓のところで、互いに顔を合わせて見ると、青木の見えないのが物足りない。
(島崎藤村『春』)
- 母はまた叔父の所へ行って、まささんありがとう、ありがとう、と心からのお礼を言っていた。
(志賀直哉『和解』)
- 彼を養った乳房はその為に袋ごと抜き取られていた。母親の胸のところには最早片方しか垂れていなかった。
(島崎藤村『春』)
- 入口のところには車夫が待っていた。格子戸を出て、勝子は名残惜しそうに岸本の方を見た。
(島崎藤村『春』)

「トコロ」の空間的な地点を指す用法が、場所、物をきびしくかぎらず、ややばやがした気持ちで、その近く、そのそば、そのあたり、というふうにいろいろな意味へと広がる。それがまた

- 聞くところによると、今度新しい国語辞典が出るそうだ。
- わたしが知っているのはだいたいこんなところですよ。
- いいところに来たね。いっしょにお茶をのまないか。

のような形式名詞としての用法へと発展していくのである。確かに、これは極めて興味深い。しかし、この事自体が本旨ではないので、その類例検討はここには割愛し、文を構成する要素の種類の検討に移る。以下、上述のことを念頭におきながら、動詞についてその動作や現象が生じた時点を示すとされている「～するところ」「～しているところ」「～したところ」に光をあて、「～タコロダ」「～タバカリダ」の使い分けについて考察していきたい。

3. 場面、時点をおさえる「～タトコロ」

まず多いのは、次のような、ある物事の進行の中のどういう状況、場面、時点、段階にあるか、ということ表現する用法である。

- ① しばらくして、謙作は金を取りに山を下りて行った。市の郵便局は近かった。貯金を替と書いた口へ、彼は持って来た替の紙を出すと、
「今日は午前中だけですがのう」と言われた。日曜を彼は忘れていた。「今、決算をすまして渡したところです」と局員は気の毒そうにいった。
(志賀直哉『暗夜行路』)

- ② 「そりゃあ、えらかった」謙作は直子がそういう時、案外しっかり、よくやったことを愉快に感じた。

「Sさんの奥さんが女中はんを連れてき来てくれはりました。今、お帰^{注1}りやしたとこどっせ」

「そうか。一赤ん坊の方も丈夫だね」

「へえ、そら立派なややはんどす」

「ちょっと看護婦さんをよんでくれ」彼は赤児のことをもっと精しく聞きたかった。

(志賀直哉『暗夜行路』)

- ③ 隣から一人の女が出て行った。間もなくその女がその部屋に入って行った。彼はじっとしてられない気持ちになった。そしてまた手を叩いた。女中は入って来て、彼が何も言わない先に

「今入ったところです。すぐです」と、なだめ顔に言った。彼は

「硯を貸してくれ」と言った。

^{ふところ}懐から白紙を出し、それを^{ちやがだい}餉台の上に延べて彼は下腹に力を入れて習字を始めた。

(志賀直哉『暗夜行路』)

- ④ 直子は睡くないので、そのままそこで雑誌を読み続けていた。そして、どれだけか経った時、直子はふと、二階で要が何か言っているのに気づき、立って階子段の^{はしごだん}下まで行き、そこから声をかけてみたが、要の返事が、寝ぼけ声でよく聴取れなかった。直子は段を登って行った。

「肩が凝って眠れない。按摩を呼んで貰えないかな」

「さあ、ちょっと遠いのよ。それも早ければかまわないが、もう十二時過ぎよ」

要は不服らしく返事をしなかった。

「仙も今、ちょうど寝た^{注2}とこだし、今から起こしてやるのも可哀そうね」

「そんなら要らない」

(志賀直哉『暗夜行路』)

- ⑤ 今、ちょうど食事が済んだところです。

- ⑥ 彼女はやっとひととおりの料理を運び終わって、席に坐ったところであった。

上例①～⑥は、構文的に観て「トコロ」が文末（言い切り）に用いられており、いずれもある動作を今終えた直後、もしくはある作用が今終わった直後の状態であることを表わすものである。特に、⑥を除けば一応会話形式となっており、時点を明示する「今」「ちょうど」といったような言葉が「トコロ」に対応する点も注目される。したがって、①②に見られる「トコロ」を「今、決算をすまして渡したばかりです」「今、お帰りになったばかりです」というふうには、「ばかり」に置き換えることが可能であり、時間的にニュアンスの違いが随伴するものの、基本的意味には大差なさそうだが、③の「今入ったばかりです。すぐです」では、どうもおかしいと感ぜられるのである。④⑤も同様に、「仙も今、ちょうど寝たばかりだし」「今、ちょうど食事が済んだばか

りです」にしてみると、非文法的だとは言えないにしても、なんとなく不自然に聞こえるのである。これは恐らく「～タバカリダ」が、ある動作が終わって間がないという意味を表わす上に、多少時間的な幅も認められ、暗に、その動作、またはある作用が終わって＜僅かしか時間が経っていない（から、…するのはむりだ）＞というニュアンス（本稿ではこれを、話し手による心理的時間感覚と称す）が、微妙ながら、こめられているからであろう。更に、④⑤の「ちょうど」という副詞が、「ほどよく」「都合よく」の意味を滲ませるものであり、マイナスの結果をとまわらないので、「～タバカリダ」とは当然ながら共起しにくい、という事実も一考を要する。③の場合も、（主人公「隣は別の奴を呼べばいいじゃないか」、女中「いいえ、名ざしなんです。それに先刻顔を見ちゃったんです」）に続く会話であるが、となりの部屋に入っている女のことを、勝手に素人臭い、善良な女という風に想象しながら待ち焦がれる主人公に対して、女中がなだめるつもりで言った場面が想定される。なにしろ、前述したような「～タバカリダ」の意味用法に基づいて考えてみると、「今入ったばかりです」に続く言葉が、「『すぐというわけにはいきません』と、怪訝な顔をして言った』であるならまだしも、『『すぐです』と、なだめ顔に言った』では、矛盾も甚だしい。⑥は会話文ではなく、どちらかという、話し手が、彼女の「やっとひととおり料理を運び終わって、席に坐って落ちついている」様子、場面を目撃したことを第三者に伝える表現である。更に言えば、「……席に坐ったところであった」は、それをとりあげた話し手の時点から観て、ある過去の事柄であると解しても大過なさそうだが、話し手の発見時と「席に坐わった」という動作の完了時との間には時間の隔たりが認められないということに気がつくのである。要するに、瞬間動作が成立した結果の状態、直後の状態は「トコロ」によって位置づけられ、話し手に、時点、場面としてとらえられる。このような、強い現実感を伴う確認判断の表現とも言うべき「～タトコロダ」は、「～タバカリダ」に置き換えることがほぼ不可能である。

- ⑦ 翌日は起きた時から謙作は何だか気分が悪かった。しかし、丸善まで行く用があって出かけると、途々むやみに嘔くさめが出た。用をすますと彼はすぐ帰って床へ入った。不規律な生活で疲れたところに、風邪をひいたので、彼はその翌日も終日床の中で暮らした。

（志賀直哉『暗夜行路』）

- ⑧ すべて順調に行った。謙作は時々眠っている赤児を覗きに行った。しかし、それは一種の好奇心のようなものからで、これが自身肉親の子であるということは、どうも、じっくり来なかった。彼は何か危なっかしい感じで、抱いて見たいとも思わなかった。直子の方はもう本統に母親になり切っていた。乳の時間が来て、寝ながらそれをやっている時の様子などにはいかにも落ち着きがあった。そして赤児も安心し切って鼻を埋めるくらいに吸いついているところなどを見ると、謙作はそれをたいへん美しい物のようにも思うし、またどうかしてそれが白い乳房にえたいの知れぬものが喰い入っているような感じで気味悪く感ずることもあった。

（志賀直哉『暗夜行路』）

- ⑨ 女の頬も、窓のガラスも、自分のどてらの袖も、手に触るものは皆、島村にはこんな冷た

さは初めてだと思われた。

足の下の畳までが冷えて来るので、一人で湯に行こうとすると、

「待って下さい。私も行きます」と、今度は女が素直につい来た。

彼の脱ぎ散らすものを女が乱れ籠に揃えているところへ、男の泊まり客が入って来たが、島村の胸の前へすくんで顔を隠した女に気がつく、

「あっ、失礼しました」

「いいえ、どうぞ。あっちの湯へ入りますから」と、島村はとっさに言って、裸のまま乱れ籠を抱えて隣の女湯の方へ行った。(川端康成『雪国』)

- ⑩ ちょうどその頃は雪がいちばん深い時であろうから、島村は鳥追いの祭りを見に来ると約束しておいたのだった。

「私二月は実家へ行ったのよ。商売を休んでたのよ。きっといらっしゃると思って、十四日に帰って来たんだわ。もっとゆっくり看病して来ればよかった」

「誰か病気」

「お師匠さんが港へ行っていて、肺炎になったんです。私がちょうど実家にいたところへ電報が来て、看病したんですわ」(川端康成『雪国』)

- ⑪ これを幾日も繰り返すのだった。そうして白縮をいよいよ晒し終わろうとするところへ朝日が出てあかあかとさす景色はたとえるものがなく、暖国の人に見せたいと昔の人も書いている。(川端康成『雪国』)

- ⑫ 夕立が通り過ぎてやがて屋の内が涼しくなる頃まで、二人の話しは連中の噂で持ちきった。その話しの途中、菅は岡見が岸本を評した言葉を持出して、「まだそれでも君の方が、溝口より腰が据わってるトサ—溝口と一緒にされちゃ可愛そうだ」こう言って笑った。溝口は最も薄志弱行な男として、連中の間に知られていた青年である。

「菅さんと話をしているところを、^{注1}傍で聞いてれば、ちっとも病人のようじゃ無い」

こう母親は、菅が帰って行った後で、吾子の顔を眺めながら言った。(島崎藤村『春』)

上例⑦に見られる「ところ」は、形式名詞ではあるが、「疲れた上に、風邪をひいた」という意味を表すものであって、いままで観てきた用法とは異なるものである。⑧～⑫の下線部の、「トコロ」を中心として構成された「～しようとするところ」「～しているところ」「～していたところ」といった形式は、言わば動詞を受けて、ある動作・現象の進行過程の中でそれがどういう段階にあるかを示す表現である。しかし、実際にそのアスペクトを表すのは「トコロ」自体にあるのではなく、それに前接する「～しようとするところ」「～しているところ」「～していたところ」の方にある。いずれも文中に使われており、助詞「へ、を」を後接する点が特徴である。⑧⑫は、話し手が、「…そして赤児も安心し切って鼻を埋めるくらいに吸いついている」「菅さんと話をしている」という、動作が進行している場面をとらえて、それを相手に伝える形式にほかならない。⑨の「実家にいたところへ」は「実家にいるところへ」に比して、意味上相違が認められないが、

⑩の「…白縮をいよいよ晒し終ろうとするところへ」は 端的に言うと、発生直前の状態や、何かの事前準備の段階、もしくは徐々にある動作・作用を始めた状態であることを示すものである。特に注目すべきは、⑧～⑫の「トコロ」の役割が単なる動的事象を客観的に述べるのではなく、むしろ、その場面でとらえたことを相手に伝えようとする、主観的な態度表明にある、ということであろう。⑨⑩⑪の「トコロへ」は、場面というよりも、時点を表わすという意味が強く、「トキニ」という言葉に置き換えることも可能である。なお、志賀直哉の『暗夜行路』には、次の⑬のような「トコロへ」にかわる「トコロニ」という用法も散見するが、このような事実からも「トコロへ」の「へ」という助詞が正確な時間を示す「ニ」と共通することが察せられる。

⑬ あの夜彼は夢を見た。

寝ているところに宮本が変な笑い顔をして入って来た。そして「坂口が旅先で死んだよ」と言った。

ここで、もう一つ興味を引くのは、「トコロ」によって示される連体修飾節の動詞の種類の問題であるが、いくつかの用例をあげるにとどめて後で具体的に述べることにする。

- ? ごはんを食べるところを撮られてしまった。
- ごはんを食べているところを撮られてしまった。
- ? ごはんを食べたところを撮られてしまった。
- ? ビールを飲むところへ、友達が訪ねてきた。
- ビールを飲んでいるところへ、友達が訪ねてきた。
- ? ビールを飲んだところへ、友達が訪ねてきた。
- ? 家に戻ると、女房が子供と一緒にテレビを見るところだった。
- 家に戻ると、女房が子供と一緒にテレビを見ているところだった。
- ? 真っ裸になるところを見られてしまって本当にはずかしかった。
- 真っ裸になっているところを見られてしまって本当にはずかしかった。
- 真っ裸になったところを見られてしまって本当にはずかしかった。
- ? 会議が終わるところへ、部長が帰ってきた。
- 会議が終わっているところへ、部長が帰ってきた。
- 会議が終わったところへ、部長が帰ってきた。
- ? 家に戻ると、家内がお風呂にはいるところだった。
- 家に戻ると、家内がお風呂にはいているところだった。
- 家に戻ると、家内がお風呂にはいったところだった。

(注：?印を付した句は文法的に問題があるもの)

4. 過去の時点を示唆する「～たバカリダ」

ここに、「～たトコロダ」の意味用法と関連づけて、「～たバカリダ」を概観し、表現面の特徴

を探してみたい。

「～タバカリダ」は助動詞「タ」が常に前接する形式で、「……して間もない状態だ」の意をもって、動作・作用・現象が成立した直後であることを表わす。

⑭ その朝、青木は行倒ゆきだおれを見たと言って、散歩から帰ってきた。

「貴方、岸本さんが帰っていらしたそうですよ」と、操は葉書を持って駆寄る。

「最早帰って来たのか」青木の眼は輝いた。「奥州の方へ出掛けて行ったばかりじゃないか」青木は妻から葉書を受取った。呼んでみると、正に岸本は鎌倉の寺へ帰っている。

(島崎藤村『春』)

⑮ 「なぜ食べないの？」

「さきほど、薬を飲んだばかりです」

⑯ じょうだんにそういって、その日はすんだのだが、翌々日、森岡正はほんとに月夜のカニをもってきた。一週間めの算数がはじまるまえ、ひょうたんかごをつき出したのである。

「せんせ、カニ。月夜のカニ。やせて、うもない月夜のカニ」

それはけさとれたばかりで、また生きていた。ガサゴソと音がしている。

(壺井栄『二十四の瞳』)

⑰ 翌日起きると、前日出した手紙の返事が来ていた。平詫ひらあやまりに詫った手紙だった。実は御妹様は写真で拝見したばかりで、自分にはそれほどの考えはなかったのですがT病院の看護婦○○に勧められてあんな手紙を差し出しました。

(志賀直哉『暗夜行路』)

⑱ 遠く離れていると、駒子の方がしきりに思われるにかかわらず、さて近くに来てみると、なにか安心してしまうのか、今はもう彼女の肉体も親し過ぎるのか、人肌がなつかしい思いと、山に誘われる思いとは、同じ夢のように感じられるのだった。昨夜駒子が泊まって行ったばかりだからでもあろう。

(川端康成『雪国』)

上例を観てもわかるように、「～タバカリダ」は、叙述対象の時点と発話時点とのあいだに、僅かな時間しか経過していないようなことを暗示する点では、確かに「～タトコロダ」と共通するところがある。しかし、⑭の場合、岸本が「奥州の方へ出掛けて行った」のは、言うまでもなく、発話時からみて明らかに過去のある時点であり、しかも、「行って間がないのに、もう帰ってきたのか」という、話し手の心情(心理的な時間感覚)がこめられている。⑮に見られる「なぜ食べないの」に対する返事として「薬を飲んだばかりです」とあるが、これも同じように、「薬を飲んだばかりなので、食べるのは無理だ」という意味であろうことは一目瞭然である。⑰も同様。⑱の「それはけさとれたばかりで、また生きていた」の場合は、そのカニのとれた「直後」が強調されるというよりも、カニのとれた時点である「けさ」が示唆されるように思われる。このように、「～タバカリダ」には、その中心的な意味の一つとして、ある動作・作用が終わって間がないので、(……するのはむりだ)という前件に反する意味が含まれている点(同じ「ばかり」の限定の意味に由来する表現で、「ちょっと油断をしたばかりに、とんでもないことになってしまった」

という原因、理由を表す用法があるが、「事態の悪化を示すようなマイナスの結果が導かれる」点が「～タバカリダ」に近似している）「僅かな時間」と言っても、「～タバカリダ」は、発話時の話し手の気持ち、心理的時間感覚によって、それが左右され、発話時点以前の、ある時点、即ち、「昨日」「先週」「去年」というふうな時間的な広がりをもつ点が注目される。それに対して、「～タトコロダ」は、ある動作・作用が終わった直後（時間的な幅は認められず）即ち、その場面、その時点を強調する、といった点が特徴的である。前者は多少離れた過去の時点（その時間的な幅は話し手の心理的時間感覚によって左右され限定される）を明示する語句と共起するが、後者はそれがほぼ不可能である。⑮は一見、「バカリ」が文末に用いられているかのようだが、実は一種の倒置というべきものである。つまり、「昨夜駒子が泊まって行ったばかりだから……同じ夢のように感じられるのだった」という形になりうるので、結果的には「バカリ」が文中に用いられたものと見てよい。ちなみに「～タバカリダ」が文中に用いられ、「～タバカリノ」という形で名詞を修飾する用例をあげておく。

- ⑮ 五年生になったばかりのかの女は、おさない頭脳と小さなからだで、むりやり一家の主婦の役を受け持たされているのだ。どんなにそれがいやでも、ぬけだすことはできない。

（壺井栄『二十四の瞳』）

- ⑯ 今出て来たばかりの駒子の部屋までが、もうその遠い世界のように思われる。そういう自分にさすが驚いて、坂を登りつめると、女按摩が歩いてた。

（川端康成『雪国』）

- ⑰ 予備軍医として研究室に戻ったばかりのこの助手はこの機会を利用して第一外科での自分の位置を固めようとしていた。他の助手も若い講師も短期現役で軍隊に引張られ、研究室が真空状態の時、浅井助手にとっては手をうっておくことは絶対に必要だった。

（遠藤周作『海と毒薬』）

- ⑱ わたしが学校につくと、いまおきだしたばかりの男先生はおどろいて井戸ばたにかけつけ、^{ちようず}手水をつかいはじめると、年とったおくさんはおくさんで、ねまきも着かえるまがなく、しちりんをやけにあおぎながら……

（壺井栄『二十四の瞳』）

- ⑲ 松明の火を前に立った、平六のまわりを囲んで、一五六人の盗人は立つものは立ち、臥すものは臥して、いずれも皆、首をのばしながら、別人のように、やさしい微笑を含んで、この命が宿ったばかりの、赤い、醜い肉塊を見守った。

（芥川龍之介『偷盗』）

- ⑳ 始業を報じる板木がなりひびいて、大石先生はおどろいてわれに帰った。ここでは最高の四年生の級長にきのうえらばれたばかりの男の子が、背のびをして板木をたたいていた。

（壺井栄『二十四の瞳』）

上例⑮～㉑の「～タバカリ」は、いずれもある動作・作用が終わって間がないという意味を担いながら、「～タバカリノ」という形で後に続く名詞を修飾するものであるが、ここで注意しなければならないのは、その場面、その時点といった意味づけのような感じが完全に消えてしまうがために、「～タトコロ」に置き換えることができないということであろう。したがって、次の㉒～㉓

に見られる「～のに」「～ので／から」「～なら」「～で」によって結ばれた文の場合も同じことが言えそうである。

- ②⑤ 午後四時をまだ過ぎたばかりなのに大部屋の中はうす暗く、ミツは窓から洩れる僅かな微光を探しながら本の頁をめくった。 (遠藤周作『海と毒薬』)
- ②⑥ { ? 試験に落ちたところなので、あまり元気がない
 { 試験に落ちたばかりなので、あまり元気がない。
- ②⑦ { ? 彼は先生にしかられたところなのに、また変なことを言い出した。
 { 彼は先生にしかられたばかりなのに、また変なことを言い出した。
- ②⑧ { ? 薬を飲んだところなら、たべるのはよくないね。
 { 薬を飲んだばかりなら、食べるのはよくないね。
- ②⑨ { ? 日本に来たところで、言葉と習慣がよくわからない。
 { 日本に来たばかりで、言葉と習慣がよくわからない。
- ③⑩ { ? ぼくは今年17歳になったところなので、酒は飲めない。
 { ぼくは今年17歳になったばかりなので、酒は飲めない。

5. テンス・アスペクトから観た「～タトコロダ」と「～タバカリダ」

以上、語義、表現上の特徴や他語との関係について検討してみたが、ここにおいては、要因の一つかと考えられる動詞の種類に焦点をあて、それらのテンス・アスペクトと関連づけながら、「～タトコロダ」と「～タバカリダ」の共通点と相違点を明らかにしたい。

まず、両者の意味的な対応関係について考える前に、「～タ」に前接する動詞の意味特徴の面での制約があるか否かを確かめておこう。

- ③① A ? 新聞を読むところへ、雪子が入ってきた。
 B 新聞を読んでいるところへ、雪子が入ってきた。
 C ? 新聞を読んだところへ、雪子が入ってきた。
- ③② A ? テレビを見るところへ、弟から電話がかかってきた。
 B テレビを見ているところへ、弟から電話がかかってきた。
 C ? テレビを見たところへ、弟から電話がかかってきた。
- ③③ A 家に帰るところを警察につかまえられた。
 B 家に帰っているところを警察につかまえられた。
 C 家に帰ったところを警察につかまえられた。
- ③④ A ? 家に帰るところへ、花子が訪ねてきた。
 B 家に帰っているところへ、花子が訪ねてきた。
 C 家に帰ったところへ、花子が訪ねてきた。

上例③①③②の「トコロ」に前接した動詞は、動作性動詞というべきものであって、A Cは日本語

として正しい表現であるとは言い難い。それに対して、③④のそれは瞬間動詞であり、④Aを除いて、いずれも極く自然に聞こえるのである。①②の「～ているところへ」はその進行の段階を表すものであるが、③④の「～ているところへ(を)」「～たところへ(を)」はともに完了または完了後の状態を表すものであると言えよう。つまり、③のAは、ある場所から自宅までの帰途に、③のBCは、家に帰り着いたあとに、「警察につかまえられた」ことになるのである。一般の瞬間動詞を「基本形ところ」が受けた場合は、直前状態しか表わすことができないが、この違いは「帰る」の持つ瞬間性と継続性に起因する。④Aを「家に帰ろうとするところへ、花子が訪ねてきた」に直すことができるのと同じように、①②のAをそれぞれ「新聞を読もうとするところへ」「テレビを見ようとするところへ」というふうに言い換えることができる。このようなことはあくまでも付随的な現象に過ぎないが、しかし、「トコロ」の本来の性質からして、前接する動詞が「～するところ」「～しているところ」「～したところ」という3段階の形式を持って、未完了・進行・完了といったアスペクトの意味を表わす、ということが確かめられるのである。したがって、①②のCを、「新聞を読み終わったところへ、雪子が入ってきた」「テレビを見はじめたところへ、弟から電話がかかってきた」というふうに、完了の意味或は動作の既然の結果を強く示す「おわる」「はじめる」を添えたりすると、極く自然に聞こえるのに気がつく。また、同じように、完了の意を表わすほかの言葉をつけてみると、

③⑤ 彼女に手紙を書きってしまったところへ、電話がかかってきた。

③⑥ テレビをちょっと見たところへ、父が会社から帰ってきた。

ようになり、その動作の継続性が消えてしまうことがうかがわれる。このように見てくると、本稿の主たる関心である「～タトコロダ」と「～タバカリダ」について、まず言えるのは、状態動詞を受ける「～タトコロダ」が文全体の時と関係なく、常にその時での完了の状態を表わすのに対して、動作性動詞・状態動詞を受ける「～タバカリダ」は、その時ではなくてもよく、多少離れたある時点での完了状態を示唆する（言わばテンス的対立）ということであろう。これは次のような用例からも充分説明できる。

③⑦ 一週間前、ひっこしをしたところへ。

とは言えないが、しかし、

③⑧ 一週間前、ひっこしをしたところへ 友子が訪ねてきた

とは言えそうである。ここでいう「一週間前」は友子の訪ねた時点であって、ひっこしをした時点にはなりにくい。ほぼ同時点にひっこしをしたのだと解してもよさそうである。ひっこしをした時点と友子が訪ねてきた時点については共時的派生の感じが強いゆえである。日本語にはまた

③⑨ 一週間前、ひっこしをしたばかりのところへ、友子が訪ねてきた。

のような表現もあるが、③⑧と同様に、「一週間前」は友子の訪ねた時点であって、ひっこしをした時点にはなれないのである。しかし、両者は、すくなくとも二つの点で異なっている。一つは、

⑳のひっこしをした時点が、一週間前のその時点とは ほぼ一致しているのに対し、㉑のそれは一週間前の前のある日かもしれないということであり、もう一つは、㉒が只ひっこしをしたその時点に重みがあるのに対して、㉓は、ひっこしをして間がないので、部屋の中がちらばっているとか、落ちついていないとかいうような場面が想起される点である。

㉔ 家に戻ると、^{注4}娘の佳代子が帰ったところだった。

㉕? 家に戻ると、娘の佳代子が帰ったばかりだった。

㉖ 家に戻ると 女房がおふろにはいったところだった。

㉗? 家に戻ると 女房がおふろにはいったばかりだった。

上例㉔～㉗は、いずれも^{注5}発見の「と」によって結ばれた文であり、「トコロ」「バカリ」が言い切りに用いられている。更に言えば、「娘の佳代子が帰った」のは、明らかに、話し手が家に戻る前であるが(㉔㉖も同様)しかし、話し手が眼前の状態、事態を感知しながらでなければならないという「～タトコロダ」の特徴が、「と」の表わす文法的機能によって裏づけられている。只娘の佳代子を既婚者と想定するだけでは、㉕の不自然さは簡単にぬぐえない。それが成立するためには、心理的時間感覚という色彩の濃いもの、つまり話し手の「会いたかった娘が嫁ぎ先へ帰ってしまったため、残念がる」気持ちが含まれなければならないのである。

㉔の用例につき、この文を直観的にどう感じるかを多くの日本人に聞いてみたところ、その回答がばらばらだったので驚かずにはいられなかった。その問いとしては、話し手が家に戻った時の、女房の居所は、という単純なものであったのである。日本語で毎日ものを考え、日本語を使って生活している日本人が日本語を考えることは、ある意味では他の言語を考えるより難しいかも知れないが、それにしても、このぐらゐの問題に対する返事は一致して然るべきであると思うのである。日本語には、「道草を食う」「目玉を食う」「足を洗う」といったような慣用語があるが、「おふろに入る」も一応その類であるとされている。慣用語の「おふろに入る」はシャンプーをしたり、体をながしたら、湯ふねにつかったりするような一連の動作を表わすが故に、継続性を表わす動作性動詞、たとえば、「食べる」「見る」「書く」「歩く」の性質と軌を一にする。そうすると、それが完了の意味を表すためには、「～おわる」が添えられて、「おふろにはいりおわる」という形にならなければならないが、残念ながら、日本語にはそういう表現がないようである。それは「～はいる」が分解された形でその瞬間性が強調されるからであろう。このように、「おふろに入る」は慣用語のみならず、「ふろばに入る」という側面ももっていることがうかがわれるのである。「おふろに入って歯をみがく」という文をとりあげて、「ふろばに入って歯をみがく」ことになるのか、それとも「ふろからあがって、そとで歯をみがく」ことになるのかと質したところ、どちらでもとれるという返事だったが、このような、無造作に使われ、無意識的に区別されるところをなんらかの形で理論づけをし、究明するのが本稿の目的でもある。「おふろに入って歯をみがく」は、「おふろに入ってご飯を食べる(入浴後ごはんを食べる意味)と同じように受け取るのが、より文法的であろう。㉔の、女房の居所についてのアンケートに応じた日本人

の大半が、「ふろばの中」と受けとめる理由がこれでやっとわかったような気がする。恐らく、「おふろに入ったところだった」が、慣用語の意味として受け取れないのは、「トコロ」という言葉に支配されるからであろう。要するに、「～タトコロ」に前接する動詞はいつも状態動詞・瞬間動詞でなければならない、という結論に至らざるを得ない。

6. 結 語

以上、「～タトコロダ」と「～タバカリダ」の意味用法とそれらの使い分けについて、表現上の特徴に即し、いろいろな場面に展開しながら考察してみた。ここに一応結論をまとめておくとすると次の如くなる。

- I 動作の直後の状態を示すものとして、両者は一致しているが、その大きな違いとしては、「～タトコロダ」のほうがより動作の成立時に近いこと、「～タバカリダ」は、話し手の心理的時間感覚によって時間的な幅が認められることである。したがって、「～タトコロダ」は、過去の時点を明示する語句とは共起しにくいのである。
- II 「～タバカリダ」は、それに前接する動詞には制約がなく、常に、動作・作用が終わって僅かな時間しか経っていない（から…するのはむりだ）という意味を伴う。それに対して「～タトコロダ」は、原則としてそれに前接する動詞が状態動詞・瞬間動詞でなければならない。話し手が常に眼前の状態、事態を感知しながらでなければならない。
- III 「～タトコロダ」は、文中において、「～タトコロナラ」「～タトコロナノデ」「～タトコロナノニ」「～タトコロデ」という形で用いられると、その場面の意味づけのような感じが消えてしまうため、不自然な表現になる。

拙い考察、先学の御批判、お教えをお願い申し上げる次第である。

注1 「お帰りやしたとこどっせ」は方言で、「お帰りになったところだ」との意。「とこ」は、「ところ」の砕けた表現。

注2 「ちょうど寝たとこだし」の「とこ」は注1のそれと同様。

注3 「菅さんと話をしているところを、傍で聞いてれば」とあるが、普通、「傍で見れば」と表現するであろう。若し、「聞いてれば」だと、「ところ」の部分が目的語として、「その話の内容」或は「その話」でなければならないが、果たして、そうなるのだろうか。

注4 「娘の佳代子」が、まだ結婚していないことを前提にして、「帰った」という意味を考える。

注5 ここで言う「発見」の「と」は、「部屋に入ると、テレビがこわれていた」「教室に入ると、みんな大きな声で笑い出した」「東京につくと、雨が降りだした」といった場合の「と」のことを指すものである。